第２章　西東京市の概要

１　地理的位置

図　３　西東京市の地理的位置

西東京市は、平成 13 年（2001）１月 21 日、田無市と保谷市が合併して誕生した市で、武蔵野台地のほぼ中央に位置している。北は埼玉県新座市、南は武蔵野市及び小金井市、東は練馬区、西は小平市及び東久留米市に接している。東西 4.8 km、南北 5.6 km、面積は 15.75 km²である。

東西に横断する主要幹線道路や鉄道路線により都心へのアクセスが良好であり、早くから東京の住宅都市として発展してきた。

市の南東部に位置する下野谷遺跡の最寄り駅は西武新宿線東伏見駅であり、新宿から約 30 分で訪れることができ、都心からのアクセスは良好である。

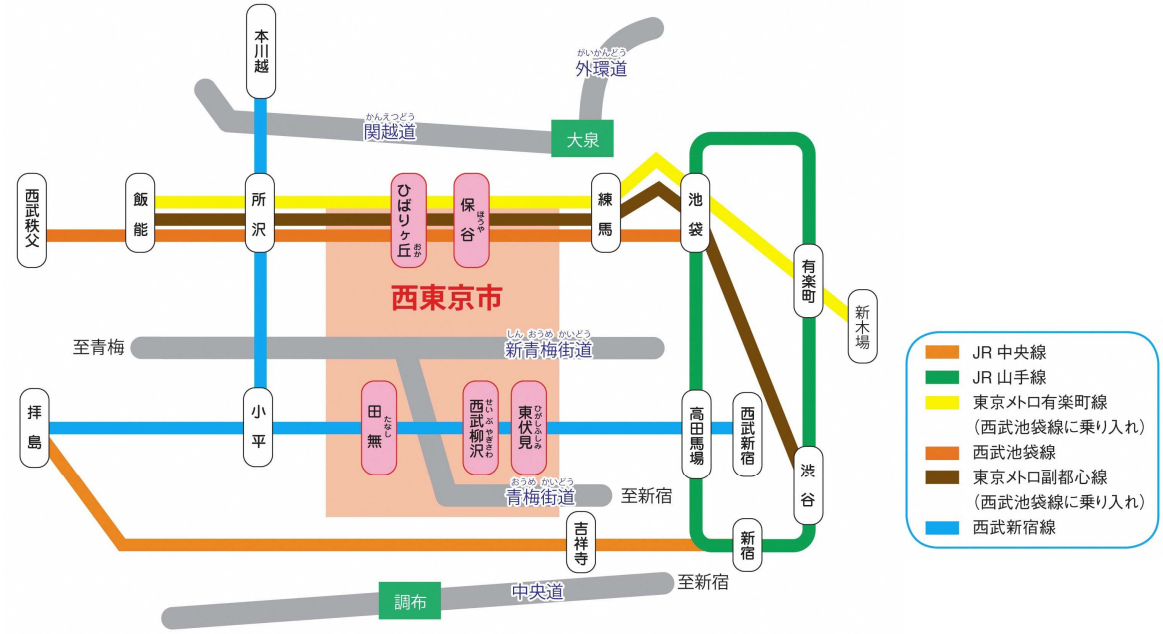


図　４　西東京市へのアクセス

２　地形・地質

西東京市内の標高は約 47～67ｍであり、起伏の少ない平坦な地形である。

市が位置する武蔵野台地は、多摩川や入間川が運んできた奥多摩の山地の礫が堆積してできた広大な扇状地であり、その形成はおよそ７～８万年前にさかのぼるといわれる。

その後、箱根火山・古富士火山の噴火による火山灰が飛来、堆積して台地が形成された。これが関東ローム層といわれる赤土で、これを基盤にその上に黒ボク土と呼ばれる腐葉土層が堆積し、本市の地表面を構成している。

武蔵野台地の標高 58～60ｍ付近は、地形面の変化に富み、湧水の湧きやすい地点が多く存在する。これらの水が源流、あるいは源流の一部をなし、市域には石神井川と白子川、また白子川の支流である新川の３本の川が流れている。

また、市域には、「宙水（ちゅうすい）」と呼ばれる地下水堆（すいたい）が多く存在しており、かつては、この地下水堆の影響で、大雨の後などに川筋や沼状の水場が見られる場所が多くあった。市の中央に位置する谷戸地域では、それらが白子川の源流地のひとつとなった。

こうした川の流れや浅い地下水の存在が、旧石器時代、縄文時代の人々の活動や初期集落の形成に大きな影響を与えている。

下野谷遺跡は、石神井川の南側台地上にあり、かつては北面する低地部に沼状の湿地帯が広がる水の豊かな景観の中にあったと考えられている。

３　人口

平成 30 年（2018）１月１日現在の住民基本台帳によると、本市の総人口は 201,058 人、世帯数は 95,878 世帯である。面積は東京都内の 26 市の中で 15 番目の大きさであるが、人口密度は２番目※と高く、比較的小さな土地に多くの住民が居住していることが特徴的である。

本市の人口の推移としては、「西東京市人口推計調査報告書（平成 29 年 11 月）」では、平成 34 年（2022）の 202,532 人まで増加し、その後、ゆるやかに減少すると推計されている。

推計の基準年（平成 29 年）から 10 年後の平成 39 年（2027）には 201,497 人と基準年をやや上回るものの、20 年後の平成 49 年（2037）には 196,516 人となり、基準年を下回る。また、平成 34 年以降、市の人口が減少する中、老年人口（65 歳以上の人口）は一貫して増加し、高齢化率（総人口に対する老年人口の割合）は、平成 29 年の 23.7％から、平成 39 年には 25.6％、平成 49 年には 31.0％になると見込まれている。

なお、史跡が所在する東伏見地区（東伏見１丁目～６丁目）の人口は 5,187 人、世帯数は 2,713 世帯である（外国人を含めた集計、平成 30 年１月１日現在）。

※（出典）東京市町村自治調査会「多摩地域データブック～多摩地域主要統計表～2016（平成 28 年版）」平成 29 年３月

４　土地利用

西東京市の総面積のうち、平成 28 年１月１日現在で、宅地が 60.5%を占めている。田はなく、畑は９％となっている。

表　３　西東京市の地目別面積

（平成 28 年１月１日現在）

地目別	面積（㎡）	構成比（%）
総面積	**15, 750, 000**	**100. 0**
畑	1, 416, 389	9. 0
宅地	9, 532, 751	60. 5
山林	29, 491	0. 2
雑種地	428, 247	2. 7
その他	4, 343, 122	27. 6

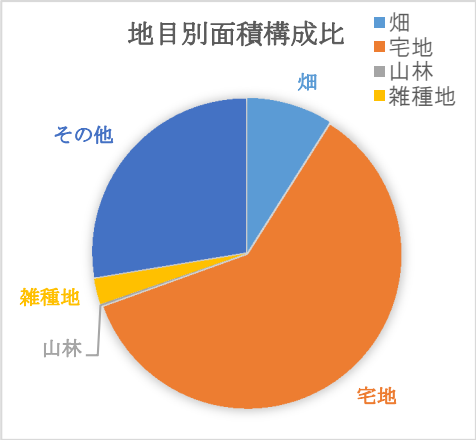


図　５　西東京市の地目別面積構成比

史跡が所在する市南東部は、昭和初期の西武新宿線（東村山～高田馬場間）の開通に伴って東伏見駅と西武柳沢駅の２駅が設置され、開発が進行した。２つの駅間が短いことから、２つの駅勢圏が重なり合ってひとつの生活圏を構成している。２駅の周辺は、近隣住民の生活に身近な商業地域となっており、青梅街道や五日市街道、伏見通りといった幹線道路の沿道は、住宅・商業などの複合した市街地が形成されている。団地や戸建て住宅地の開発が進むなど、地域内の農地の割合は市平均以下となっているが、緑地や景観の面では、都立東伏見公園や東伏見稲荷神社、下野谷遺跡公園があり、良好な景観を形成し、多くの市民に親しまれている。また、東伏見駅の南は早稲田大学の東伏見キャンパスが広がる文教地区でもある。

都立東伏見公園より史跡を望む

東伏見稲荷神社

５　みどり

◇緑化重点スポット

西東京市みどりの基本計画（平成 16 年(2004)策定）では、史跡のある東伏見・西武柳沢駅南部地域の概算緑被率（緑におおわれた土地の割合）は 23%であり、市の平均 29%を下回っている。しかし、同計画で東伏見・石神井川周辺はみどりのシンボル拠点（緑化重点スポット）と位置付けられており、その後、石神井川の整備や都立東伏見公園の整備などが進んでいる。

同計画には、史跡の立地する石神井川沿いの緑の保全も挙げられており、今後はそれに加え、史跡の景観を補完する大切な要素として、その植生なども含めて考えていく必要がある。

６　都市計画（規制）とマスタープラン

◇都市計画

西東京市は、市全域で一つの都市計画区域を構成している。史跡及びその周辺の都市計画は表４のとおりである。

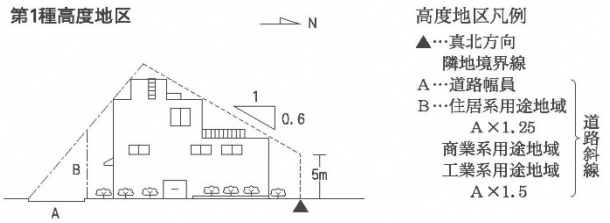
下野谷遺跡の東半部は、第１種中高層住居専用地域に当たるため、中高層のマンションなどの開発が進み、遺跡の一部は記録保存調査の後に消滅している。しかし、史跡の位置する遺跡の西半部に関しては第１種低層住居専用地域に当たり、今後史跡として保護を要する範囲には低層の個人住宅等が建設されているなど、大規模な開発を免れている。

史跡の周辺地域では、表４のとおり、西東京都市計画道路３・４・17 号線が計画されている。史跡に隣接しており、史跡へのアクセス向上に有効である一方で、縄文時代から残る台地と谷の景観や遺跡への影響等が考えられるため、整備の際には、景観の保全について注視し、景観を損なうことのないよう配慮した整備とする必要がある。

また、西武新宿線の連続立体交差事業が計画され、下野谷遺跡の最寄り駅である西武新宿線東伏見駅も計画範囲（準備中）に入っており、史跡へのアクセス向上が期待できる。

表 4　下野谷遺跡周辺　都市計画

	都市計画	史跡地及び下野谷遺跡周辺
用途地域等	用途地域	第１種低層住居専用地域
	容積率	80%
	建ぺい率	40%
	高度地区	第１種
日影規制	防火地域	指定なし
	高さの制限	10m
	日影が規制される建築物	軒高が７ｍをこえる建築物又は地上３階以上の建築物
	規制される日影時間	測定水平面：1.5m 規制される範囲：５ｍをこえる範囲➡３時間以上 10mをこえる範囲➡２時間以上 規制値種別：（一）
その他の地域地区・都市施設等	用途地域	隣接する遺跡の東半部は、第１種中高層住居専用地域
	都市計画道路	近接地に「西東京都市計画道路第３・４・17号（東伏見線）」の計画あり
	都市計画河川	近接地に「西東京都市計画河川第１号石神井川」の計画あり
	都市計画公園	周辺に「西東京都市計画公園第５・５・１号東伏見公園」の計画あり
	都市計画緑地	近隣の石神井川沿いに「西東京都市計画緑地第２号東伏見石神井川緑地」の計画あり
	特別緑地保全地区	周辺の東伏見稲荷神社に特別緑地保全地区（「西東京緑地保全地区第１号東伏見稲荷緑地保全地区」）の計画あり



◇西東京市都市計画マスタープラン

史跡が所在する東伏見地区は、近接する富士町、保谷町、柳沢とともに「東伏見・西武柳沢駅南部地域」として、地域別のまちづくりの方向性がまとめられている。地域の将来像を、「坂があり、みどりと水に親しめる健康的なまち」とし、まちづくりの具体的な方向性を掲げている。

以下がその抜粋である。

10　東伏見・西武柳沢駅南部地域

（４）地域の将来像

「坂があり、みどりと水に親しめる健康的なまち」～東伏見・西武柳沢駅南部地域～

石神井川に向かってゆるやかに傾斜する地形的な特徴を活かした地域づくりを目指します。石神井川や農地・都立東伏見公園をはじめとする公園の保全・整備により、みどりと水に親しめるまちの形成を目指します。学校のグラウンドや社寺、福祉施設などの多様な施設の存在を活かして、健やかに暮らせる健康的なまちづくりを目指します。

図　６　東伏見・西武柳沢駅
南部地域まちづくり方針図

平成 26 年 3 月改定「西東京市都市計画マスタープラン」に加筆

７　産業

本市の産業について、歴史的に見れば、江戸時代には旧田無市の地域が青梅街道の宿場町として北多摩地区の商業拠点となっていたが、当時の市域全体としては農地が多くあり、江戸への農産物の供給地となっていた。

その後、昭和 30 年代に高度経済成長期を迎え、本市域でも市街化の進行に伴い産業構造が大きく変化したが、現在でも市域面積の約１割が農地として、主に野菜、果樹、花卉、植木が生産されており、都市農業の振興を担う自治体としての様相も呈している。

西東京市まち・ひと・しごと創生総合戦略では、まちの賑わいの醸成と併せて地域に根差した産業の振興に取り組むとしている。また、農業の多面的な役割を活かし、援農ボランティアや市民活動団体などとの連携や交流、直売所の魅力の充実といった取組を進めるとともに、地域に存在する資源を活かした商品の開発など、市民、地域、産業が連動することによる新たな価値の向上を生み出すとしている。

史跡下野谷遺跡を貴重な地域資源として活用し、まちの賑わいの醸成や産業振興に結び付けることが求められている。

８　文化財

本市の指定文化財等は 57 件、周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は 14 ヶ所である（平成 30 年３月現在）。そのほか、石仏・石造物、寺院及び神社等様々な文化財が存在している。

合併に伴い、より多様な歴史文化を背景に持つようになり、文化財の数や内容の幅も広がり豊かになったことから、これらの歴史文化、文化財を市民が共有し、自らの郷土の財産として大切に思えるよう、育てていく必要がある。

史跡下野谷遺跡は、本市では初めての市単独で保有する国指定の文化財であり、市の貴重な文化資源としての保存と活用が期待されている。

また、史跡の周辺には東伏見稲荷神社をはじめとした文化財も多くあり、それらを一体としてまちづくりに活かすことも重要である。

表 ５　市内の指定・登録文化財の内訳

	有形文化財				無形文化財	史跡	名勝	天然記念物	計
	建造物	絵画・彫刻・工芸品	古文書	歴史資料	民俗芸能				
国指定	0	0	0	0	0	2	1	0	3
都指定	1	0	0	0	0	0	0	0	1
市指定	2	9	4	29	2	2	0	2	50
国登録	3	0	0	0	0	0	0	0	3
計	6	9	4	29	2	4	1	2	57

平成 30 年 3 月現在

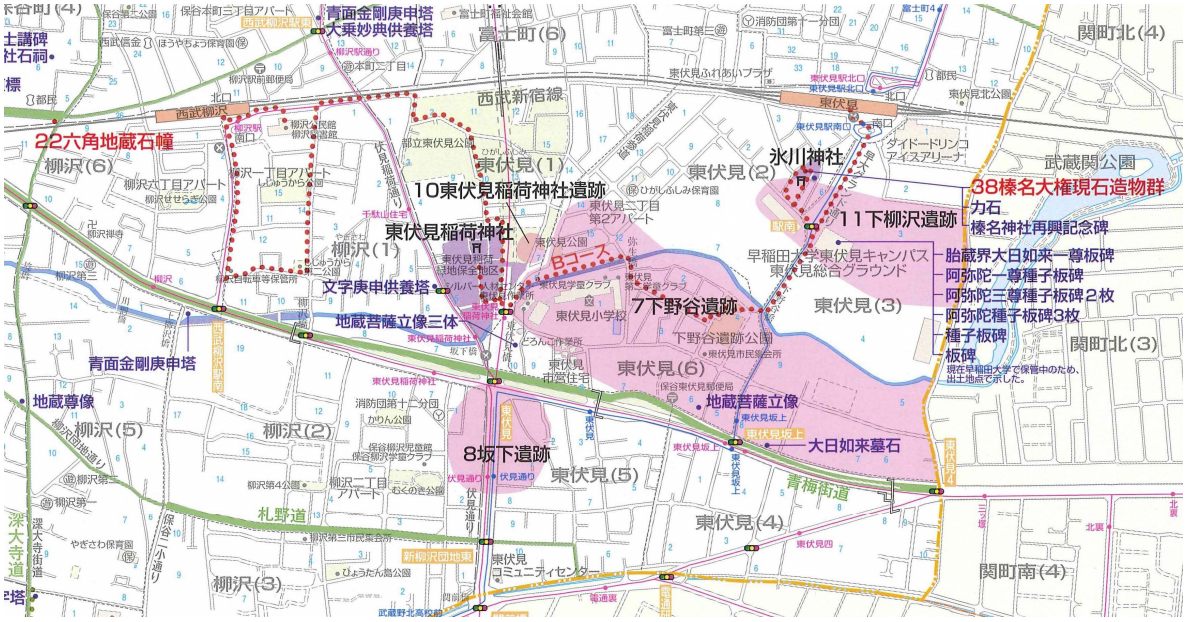


図　7　史跡周辺の文化財分布　（出典：西東京市文化財マップ）

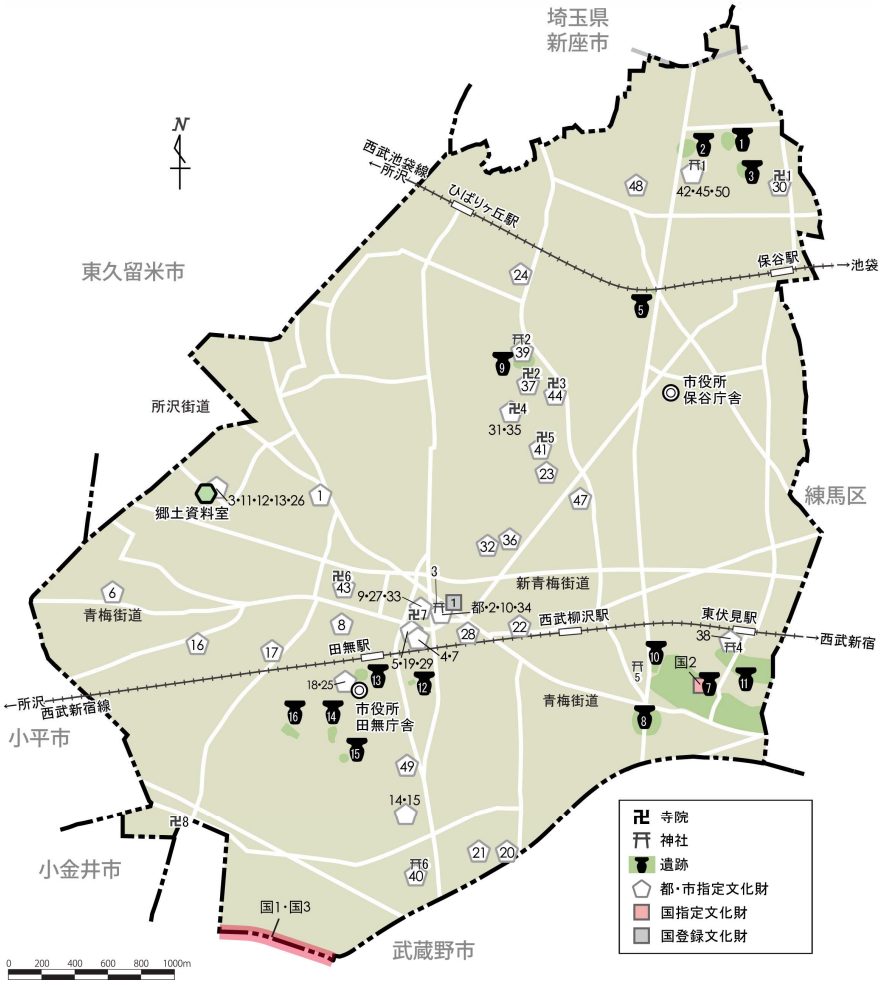


表　6　市内の遺跡

区　分	名　　称
遺跡１	北宮ノ脇遺跡（きたみやのわき）
遺跡２	上前遺跡（かみまえ）
遺跡３	中荒屋敷遺跡（なかあらやしき）
遺跡５	南入経塚（みなみいりきょうづか）
遺跡７	下野谷遺跡（したのや）
遺跡８	坂下遺跡（さかした）
遺跡９	上保谷上宿遺跡（かみほうやかみじゅく）
遺跡10	東伏見稲荷神社遺跡（ひがしふしみいなりじんじゃ）
遺跡11	下柳沢遺跡（しもやぎさわ）
遺跡12	上向台北遺跡（かみむこうだいきた）
遺跡13	下宿遺跡（しもじゅく）
遺跡14	下宿南遺跡（しもじゅくみなみ）
遺跡15	上向台西遺跡（かみむこうだいにし）
遺跡16	田無南町遺跡（たなしみなみちょう）

（４・６は欠番）

図　8　市内の指定・登録文化財と遺跡の分布図（文化財の名称は附編参照）

９　西東京市の歴史的環境

（１）最初の一歩と集落のはじまり～旧石器時代・縄文時代の人々の活動と集落の展開～

市域北部の白子川、中央部の新川（白子川支流）、南部の石神井川の流域には、旧石器時代から縄文時代の遺跡が 13 遺跡確認されている。現在市域で発見されている最古の遺物は、約４万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。

その後、縄文時代に入り、石神井川流域南岸の下野谷遺跡周辺の一帯に集落が営まれ、特に今から４～５千年前の縄文時代中期には、石神井川流域の拠点となる大規模な環状集落がつくられた。これが下野谷遺跡で、南関東でも屈指の規模を持つ縄文時代中期の集落遺跡として、西集落の一部は国史跡に指定されている。

下野谷遺跡遺物出土状況
（東集落）

（２）荒涼たる武蔵野の原野～弥生時代以降、中世初期までの風景～

縄文時代後期になると、下野谷遺跡から遺構や遺物が減少する。これは、気候変動と生業形態を含む社会変化が原因とされており、石神井川や白子川の水量や水質も変化し、人々は、弥生時代以降は稲作農耕に適するような、より下流域に移っていったと考えられる。

その後、弥生時代から平安時代後期（中世初期）にかけては、坂下遺跡で平安時代の住居が１軒、下柳沢遺跡で中世のものと考えられる地下式壙がまとまって見つかっているのみで、人々が定着し、生活した跡がほとんど見られない。この様相は、武蔵野台地の中央部ではほぼ変わらない。古い短歌に「武蔵野は月の入るべき影もなし 草より出でて草にぞ入ぬる」などと詠まれている風景は、葦原や灌木が生い茂る、開発と定住をこばむ荒涼とした原野である。

（３）定住化への動き～鎌倉時代以降、初期定住集落の成立～

市指定文化財第３号
「延慶の板碑」

鎌倉時代に入ると、武蔵野台地にも様々な武士団が形成され、鎌倉へ通じる鎌倉街道がつくられた。市域でも大きな武士団のいた八王子へ通じる横山道がつくられ、この横山道付近の谷戸地域で「延慶の板碑」が発見されている。板碑とは、供養、追善などのために建立された板状の塔婆のことで、鎌倉時代にすでに谷戸地域に人々が住んでいたことを示す貴重な資料である。このように、室町時代頃までには、比較的水の豊かな土地に散在型の初期集落が形成され、現在につづく社寺や民間信仰の講等を中心に地域ごとの歴史文化を育んでいった。

なお、「田無」「保谷」が史料に初めて現れるのは「小田原衆所領役帳（しょりょうやくちょう）」であり、天文５年（1536）の検地についての記載には「廿七貫五百文江戸田無南沢」、「九拾八貫八百拾文小樽保屋（こぐれほや）」とあり、小田原北条氏による支配下に組み入れられていたことがわかる。

（４）西東京市の原型～江戸時代における宿場田無と農村集落の形成～

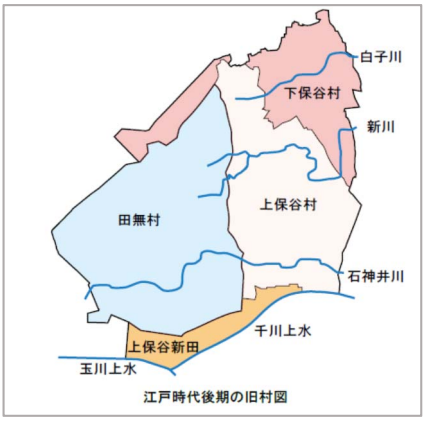


図９　江戸時代後期の旧村図

江戸時代に入り、慶長 11 年（1606）に青梅街道が開通すると、馬の乗り換え（継馬（つぎうま））などのため田無宿が置かれた。青梅街道は武蔵野諸村と江戸方面を結ぶ大動脈として重要な役割を果たし、田無村発展の大きな原動力となった。また、名主下田半兵衛による、養老田の設置や社寺再建などの優れた取組により田無村は、経済的、文化的にも地域の中心的な役割を果たすようになる。

一方、上保谷、下保谷村の両村など、田無宿周辺には新田も拓かれ、江戸の近郊農村として発展する。市域の南部境界には、承応２年（1653）に開削された玉川上水と元禄９年（1696）に玉川上水から分水された千川上水が流れている。玉川上水は、江戸市中への給水に大きな役割を果たし、その後、武蔵野一帯にも様々に分水され、灌漑用水や新田開発等に利用された。また、平成 15 年（2003）には国史跡に指定されている。なお、玉川上水堤のヤマザクラは、江戸時代八代将軍吉宗の時代に植え付けられた桜並木で、国名勝「小金井（サクラ）」である。

さらに明治４年（1871）に田無用水から分水した田柄用水は周辺の新田開発に大きく寄与した。

（５）近代都市の建設～様々な苦難を経て、近代都市として力強く再出発～

明治時代以降、田無村は地域の中心として発展していたが、明治 22 年（1889）の新宿・八王子間、明治 28 年（1895）の国分寺・川越間の鉄道の開通によって大きな打撃を受けることとなる。

第二次世界大戦前には、多摩地域に大きな軍需工場が多数建設され、下野谷遺跡に隣接する武蔵野市には中島飛行機武蔵製作所が建設された。西東京市域にも関連工場や工員寮などの施設が建設され、田無町北部には昭和３年（1928）に中島飛行機発動機試運転工場が建設された。昭和 13 年（1938）には、その南に隣接して中島飛行機田無鋳鍛工場（翌年、中島航空金属と改称）が建設され、こうした大工場への空爆は激しく、田無、保谷にも大きな人的被害があった。

戦後の復興はめざましく、ベッドタウンとしてひばりが丘団地等大規模な宅地開発が行われ、さらに住宅地やマンションが急増し、人口が飛躍的に増加した。

このように、宿場町の繁栄を引き継いだ田無市と新田開発を含む首都近郊農村から発展した保谷市は、各々独自の歴史文化を育んできた。また、信仰や集落の発展の時期の違いを見ると田無村、上保谷村、下保谷村、上保谷新田の旧村等で、それぞれ特徴的な歴史文化が息づいている。保谷には渋沢敬三らにより民族学博物館が建設された歴史もある。このような多様性は、大きな特色の一つであり、現在、それぞれの地域の個性が寄り添いながら、また、アニメーション文化の振興やランドマークとして愛されるスカイタワー西東京、多摩六都科学館の建設等、新たな文化の動きも取り込みながら、西東京市の歴史文化を形づくっている。

このような歴史文化の基盤となるのが、市域に最初の一歩を記した下野谷遺跡に残る人々の生活であり、文化である。縄文時代の人々が集い、ムラをつくり、この地に千年もの間住み続けた理由やその価値を考えることは、現代の我々の生活をより豊かにすることにつながるだろう。